

## <研究ノート> 2017年の六曜（六輝）問題

著者	湯浅 吉美
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	16
ページ	159-166
発行年	2016-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00000466/">http://id.nii.ac.jp/1354/00000466/</a>



# 2017年の六曜（六輝）問題

Two Different Views of Rokuyô (or Rokki) in the Year 2017

湯 浅 吉 美

YUASA, Yoshimi

## 1. はじめに

さる知人から問われて最近知ったのだが、来たる2017年の春先には、また旧暦に纏わる小さな問題が指摘されていた。問題となったこと自体が筆者には不思議に思われたのだが、それがどのような場面で頭をもたげてくるかを思うと、決して小さな話でもない。大袈裟に言うと、日本中で何千人何万人の人々の、一生の大事に影響する（少なくとも、漠然とそのような意識されている）と評することもできる。また、ネット上などに見られる説明の中には、問題の本質とその解決とに関して、やや難ありのものも見当たったので、結局きちんと理解していない向きもありそうだとの危惧もある。さらに、21世紀の今日、そんなことが問題になるという事実そのものが、「日本」を理解するうえで無視しがたい要素の一つかもしれぬとも思うところから、小稿をものした次第。もとより論文ではなく、研究ノートにも当たらず、言わば雑感の類に過ぎないけれども、大学の紀要とはいいい条、こうした啓蒙の小文もありではないかと思うので、あえて投稿させていただいた。

この問題が読者諸賢に如何なる形で関わるかということ、2017年のカレンダーをお買い求

めの際、思い出してご注意ください、ということになる。皆様よくご存じの、大安、友引、仏滅などの記載が一部異なる品が出回っている可能性がある。もっとも、執筆（2016年夏）の時点で問題はすでに終息に向かっているの、さしたる混乱は生じないと思う。ともあれ、お手持ちのカレンダーを確認する縁くらいにはなるであろう。

## 2. 問題の所在

この「問題」は六曜（ロクヨウ・リクヨウ。六輝とも）と呼ばれる暦注に関することなので、順序としてまず、それはどのような暦注であるかを見ておこう。

現在でも多くのカレンダー類に六曜が記載されている。六曜とは曰く、先勝、友引、先負、仏滅、大安、赤口である<sup>1)</sup>。迷信的暦注の一つで、吉凶に関わる科学的根拠は無論ない。幕末から非公認の暦に載るようになり、今日では最もよく知られ、意識されている暦注だといってよい。一般的な解釈を示す（【高】は高島易断説、【土】は土御門家説<sup>2)</sup>）。

先勝…センショウ、センカチ、サキガチ。

急用や訴訟に吉、また午前中が吉。

【高】 万事急ぐこと吉、午後凶。

【土】 午前吉、午後凶、急いで吉。

キーワード：六曜、六輝、旧暦、吉凶、迷信

Key words : rokuyô, rokki, pre-modern calendar, good or bad omen, superstition

友引…トモビキ。物事に決着がつかない日  
といい、「友を引く」ところから凶事（と  
くに葬儀）を行なうことを嫌う。逆に結  
婚式など吉事には用いられる。

【高】 夕刻大吉、葬式を忌む。

【土】 午前は利益なく、夕方吉。

先負…センブ、センマケ、サキマケ。先勝  
とは逆に、急用や訴訟などに凶。また、  
午前中が凶ともいう。

【高】 静かなことに吉、午後吉。

【土】 平静を守って吉、午後吉。

仏滅…ブツメツ。万事に凶だという<sup>3)</sup>。

【高】 凶日、何事も忌む。

【土】 吉凶なし。

大安…タイアン、ダイアン。旅行や結婚な  
ど万事に吉。

【高】 吉日、旅行・移転その他に吉。

【土】 吉日にして万事進んでよし。

赤口…シャック、シャッコウ、ジャッコウ。  
大凶とされるが、正午だけ吉という。

【高】 凶日、但し正午だけ吉。

【土】 正午は吉、前後は大凶。

毎日への配当は月切りで、旧暦の日取りに  
従って決定される<sup>4)</sup>。と言っても、実際はす  
こぶる簡単なことであって、旧暦の1日（つ  
いたち=朔日）に以下の如く配当し、2日以

降にも同じ順序で当てはめてゆくだけである  
（筆者はショウ、イン、フ、メツ、アン、コ  
ウと呪文のようにして覚えている）。

正月・7月…先勝<sup>5)</sup>

2月・8月…友引

3月・9月…先負

4月・10月…仏滅

5月・11月…大安

6月・12月…赤口

なお、旧暦では2、3年に一度、閏月が入るが、  
その場合は前月と同じとする（閏正月は正月  
と同じ、ということ）。この配当を表1に示す。

このような表がなくとも、簡単な算術で旧  
暦日付から当日の六曜を知ることでもできる。  
以下のようにすればよしい。説明のため、  
旧暦での日付をM月D日とすると、

- ① D-1を6で割った余りをとる（当然、  
ゼロから5）
- ② その余りに、M-1を加える（ゼロか  
ら最大16になる）
- ③ 手順②の和を6で割った余りをとる  
（これも当然、ゼロから5）
- ④ 手順③の答えが、0：先勝、1：友引、2：  
先負、3：仏滅、4：大安、5：赤口に  
対応する

たとえば、9月21日（旧暦）を例にとると、

表1 六曜の配当

日 月	1日	2日	3日	4日	5日	6日
	7日	8日	9日	10日	11日	12日
	13日	14日	15日	16日	17日	18日
	19日	20日	21日	22日	23日	24日
	25日	26日	27日	28日	29日	30日
正月・7月	先勝	友引	先負	仏滅	大安	赤口
2月・8月	友引	先負	仏滅	大安	赤口	先勝
3月・9月	先負	仏滅	大安	赤口	先勝	友引
4月・10月	仏滅	大安	赤口	先勝	友引	先負
5月・11月	大安	赤口	先勝	友引	先負	仏滅
6月・12月	赤口	先勝	友引	先負	仏滅	大安

①  $21 - 1$  を6で割ると、余りは2

② それに  $9 - 1$  を加えると10

③ 10を6で割ると、余りは4

④ したがって、9月21日の六曜は大安

ただし、上記の手順は実にもっともらしいが、噴飯物の間抜けさがある。というのは、六曜を求めたい日の旧暦日付をまず以て知る必要があるわけだが、それは一々カレンダーを見なければわからない。しかるに、旧暦日付を載せているようなカレンダーであれば、必ず六曜も書いてある。ゆえに、計算などする必要はない…<sup>6)</sup>。

さて、旧暦でひと月の日数は、大月が30日、小月が29日と決まっている。割り当てる六曜は文字どおり6種なので、大月（30日）とその次の月の1日とでは、六曜が1つ飛ぶことになる。たとえば、正月が大だとすると、正月1日に先勝を割り当て、2日が友引、3日が先負、という具合に進んで、30日は赤口、そして2月1日には友引を当てるから、そこで先勝が飛ぶ。ところが正月が小だと、29日が大安で、翌日2月1日には友引を当てるので、赤口と先勝の2つが飛ぶ。このあたりのことが六曜をして、何やら神秘的な、凡慮の及ばぬ仔細でもありそうな、摩訶不思議なもののように振る舞わせているのであろう。整理して記せば、

- 順繰りに見てゆくと時々1つまたは2つ飛ぶところがある = 旧暦の月末
- その月末とは、日常は意識しない旧暦日付なので、いつ飛ぶかわかりにくい
- 旧暦では月ごとの大小の並びが年ごとに異なるので、1つ飛ぶのと2つ飛ぶのと、事実上、規則性がない<sup>7)</sup>
- ゆえに、神秘性を感じさせる（実際は、旧暦日付と六曜との対応は毎年同じ）

以上のようにまとめられよう。

さて、いよいよその「問題」の所在である。

その内容を約言すると、

2017年の2月26日から3月27日の間の六曜につき、2種類のカレンダーが出回っている。一方は2月26日を赤口、27日を友引とし、3月27日の赤口に至る（仮にA案と呼ぶ）。もう一方は、2月26日を友引、27日を先負とし、3月27日の先勝に至る（同じくB案）。両者は、3月28日の先負で足並みを揃える。

ということになる。文章では要領を得ないので、これもまた表にして示す（次頁、表2）。

このことは、一般の社会生活においては、どちらになろうと何の影響もないが、一部の業界では無視しがたい問題となる。顕著なのは、カレンダーを作る出版・印刷業と、いわゆる冠婚葬祭に関わるところで、結婚式場、神社、寺院などは深刻であったという<sup>8)</sup>。一体なぜ、このような事態が生じたのであろうか？というに、答えは簡単なことで、要するに旧暦2月の朔がいつなのか、その見解の相違ということに尽きる。

朔とは、地球から見て太陽と月とが同じ方向にある（黄経が一致する）ときのことをいう。現在は新月と称し、これを月齢0.0とする。太陽も月も止まることなく運行しているから、朔というのは時間的には瞬間であることに注意が必要で、計算によって何月何日何時何分何秒と求まる<sup>9)</sup>。旧暦でも基本的には同じことで、干支何々の日の何刻何分というように算出される。旧暦ではそれを二十四気の計算結果と組み合わせることにより、その朔が何月の朔なのか決めるという点が異なるだけである。そして、瞬間としての朔を含む一日（いちにち）を「朔日」（サクジツ）と呼ぶ。こ

表2 両案の比較

	日	月	火	水	木	金	土
	2/26	27	28	3/1	2	3	4
A案	赤口	友引	先負	仏滅	大安	赤口	先勝
B案	友引	先負	仏滅	大安	赤口	先勝	友引
	5	6	7	8	9	10	11
A案	友引	先負	仏滅	大安	赤口	先勝	友引
B案	先負	仏滅	大安	赤口	先勝	友引	先負
	12	13	14	15	16	17	18
A案	先負	仏滅	大安	赤口	先勝	友引	先負
B案	仏滅	大安	赤口	先勝	友引	先負	仏滅
	19	20	21	22	23	24	25
A案	仏滅	大安	赤口	先勝	友引	先負	仏滅
B案	大安	赤口	先勝	友引	先負	仏滅	大安
	26	27	28	29	30	31	4/1
A案	大安	赤口	先負	仏滅	大安	赤口	先勝
B案	赤口	先勝	先負	仏滅	大安	赤口	先勝

れすなわち「ついたち（月立ち）」である。以上から、朔そのものは、24時間、いつにでもなりうる事が理解されよう。

ところが、2017年のうちに当てはまる旧暦2月の朔を計算してみると、2月26日（現行太陽暦）の23時58分頃という、まことに微妙な時刻となる。厄介なことに月は、恒星や惑星などと比べて絶対的に地球に近く、地球と兄弟とさえ言われるくらいだから、互いに及ぼし及ぼされる影響力が桁違いとなる。ために、月の動きを将来に向って正確に計算し尽くすことは至難の技で、精密な値は2年先くらいまでしか保証できないのである。

また、計算の基準とする地点をどこに取るか。さしあたり、東京、京都、明石などが候補となるであろうが、このことだけで数分の差を生ずることもある。さらに、計算を進めてゆく過程での精度の問題も無視できない。有効桁数の取り方のちょっとした違いが、次のステップの計算に影響を及ぼすこともある。

このような事情により、2通りの旧暦が提示されてしまったのである。算出された朔を含む日を旧暦のついたちとするのは既定だか

ら、23時50何分ならば26日が旧暦2月1日、わずかでも0時を過ぎるならば、27日が旧暦2月1日となり、それぞれに基づいて六曜を配当した結果がどちらも世に出てしまった。旧暦2月の朔日には友引を当てるのだから、2月26日を旧暦2月1日とするならば当日が友引（B案）、明けて27日を朔日とするならば当日が友引で、前日26日は旧暦正月の晦日だから赤口となる（A案）。

なお、ここで一つ、いささか贅言を費やしたい。それは一部のウェブサイトなどで、「これ（26日23時58分のこと—引用者注）を『26日に旧暦2月1日を迎える』と見なすかどうかで六曜の配当が異なっていたわけ」（傍点、引用者）と説明している点について。些細な揚げ足取りのようではあるけれども、「見なすかどうか」の問題ではない。たとえ26日の23時59分59秒でも、27日の0時0分0秒（これは27日に入る）でも、それぞれの日付を旧暦のついたちとして扱うことは動かないのであって、決して「見なすかどうか」などという恣意の介入を容認するものではない。誤解や無理解を助長するような情報発信は止めて

ほしいと思う<sup>10)</sup>。

### 3. どう解決する（した）か

この問題の解決は、簡単といえば簡単である。問題を生じた原因が上述の如くなのだから、要は件の旧暦2月朔が確定されればよいのであって、それが確定した上は、六曜の配当にも異論の余地は無くなる。しかしながら、そう単純にも割り切れない事情がある。

そもそも旧暦はすでに過去のものであるからして、いずれの公的機関・組織もそれについて公式見解を提示することはない。ゆえに「権威ある」計算結果は、いつまで待っても、どこからも出てこない。旧暦を使うことは私的なことで、言わば「趣味」なのである。実際、国立天文台も日本カレンダー暦文化振興協会（暦文協、一般社団法人）も、この件に関してということでは、沈黙を守っている。

とはいえ、常識的に考えて最も信頼すべき情報源は国立天文台であろう。これにはまず異見は出まいと思う。しかし、国立天文台では毎年2月に翌年の「暦要項」を発表しており、それには全ての朔の日時が掲載される<sup>11)</sup>。もちろん件の朔についても、すでに本年(2016年)2月に発表されており、2月26日23時58分とある。したがって、この問題については、上掲のB案を採ることになる。もしA案に固執するならば、これに対抗できるだけの根拠や条件、あるいは蓋然性を示さねばならない。無論、そこまでは（できる）人は、まずあるまい。だからこそ、この「問題」はすでに終息している。

事のついでに付言すると、この暦要項は、<http://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/yoko/> で閲覧することができるが、天文台の発表を承けて『官報』にも掲載される。カレンダーを

製作・販売する業者などは、独自に計算を行ったり他の情報源に依拠したりするところもあるそうだが、より一般的には、この「お墨付き」を得て製作しているようである。暦要項、ひいては『官報』の情報の中には「国民の祝日」の記載もあり、とくに「春分の日」・「秋分の日」（太陽黄経がそれぞれ0度・180度となる瞬間を含む日）は、天文台の発表する日時を得て決定される。ということは、小稿の一件と同様の「問題」が起りうる。すなわち、たとえば「3月21日が春分の日」と記載したカレンダーを暦要項発表以前に生産したところ、暦要項が出てみたら春分は3月20日だった、それっ自主回収だ！、などという事件が起らぬとも限らない。

### 4. むすびにかえて～この一件を巡っての雑感

筆者は具体的な事例を探してはいないものの、一ほとんど意義のない穿鑿だから一、同趣の問題は、過去にも起こったし、未来にも起こる。あるウェブサイトでは、ご丁寧にも、「旧暦を決める元となる二十四節気や月の満ち欠けの正式な日時は、毎年2月に国立天文台が翌年分を発表しているため、それ以降の六輝については変更させていただく場合があります」と断っている<sup>12)</sup>。かなり馬鹿げた話である。

一体どうして、そんなことを心配しなければならないのか。筆者に言わせれば、偏に一部の業界が、商業的な事情から、必要以上に早手回しに動いているからであろう。世間一般では「好いお日にちの御予約は1年前」というのが通り相場らしいし、大多数に慶ばれるような日取りはさらに早くの予約が必要のようにも仄聞する。今回問題とされた件は、たまたま2月末から3月末にかけてという、

まことに婚儀に好適な時期であったがゆえに、ちょうど1年前の2016年2月に2017年の暦要項が発表されるのを待たずに、1年半とか2年とか前に式場を予約する（または、させる）都合上、その際に噴出したものだったのではないかと推察する。要するに、人の気があまりに先へ先へと進みすぎたことの弊だったのではなかろうか。

ある結婚式場では、問題が問題として顕在している間、両案のカレンダーを示して当人に選択させたという。これはあまりと言えはあまりな態度で、「本当は六曜の吉凶なんか迷信です」と言わぬばかりではないか。そして何が起きるか。詮ずるところ、吉日（すなわち稼動日）が増えて、式場（および周辺諸業）が儲かるわけで、考えようによってはいささか悪質な気もする<sup>13)</sup>。しかも、A案を採って大安を予約したカップルは、実際は大凶とされる赤口に挙式することになる。もともと大安を選ぶからには当人たち、六曜の吉凶を意識しているわけで、その二人に何と申し訳するつもりであろうか。

ともあれ、現行太陽暦の採用に伴って迷信的暦注が公的には廃止されてから、すでに140年以上を経過し、「科学の世紀」と謳われた20世紀を丸々超えて21世紀となった今日なお、かかる話題が生まれたことは、一驚に価するであろう。ことほど左様に、人々の心の内なる世界に関わる物事を、変えたり払拭したりすることは難しい。もう少し、そういった点について述べたかったが、六曜の仕組みなどを記したため紙数を超過してしまった。迷信であることを百も承知でこのような事柄を研究することは、むしろ下手な政治史、法制史、経済史などより大切ではなかろうか、と牽強付会の一語を記して締め括りとする。

## 注

- 1) 六曜については、『簞篋内伝金烏玉兎集』（ホキナイデンキンウギョクトシユウ）や『暦林問答集』など暦注解説書類にも所説なく、公認の暦には記載されることがない。江戸時代半ば頃から通俗的解説書に散見されるものの、現在のそれとは一致しない点が多い。幕末に至って、ほぼ現在の形となったようだが、流行したのは明治も半ば以降と見られる。最も新しく、最も怪しげな暦注である。
- 2) 高島易断説は、幕末・明治の実業家高島嘉右衛門が明治9年（1876）に隠棲した後、呑象と号して編述した『高島易断』を指す。元々は高島が幕末に獄中で没頭した、易の研究に基づく。ゆえに、その流行は明治前期以降である。土御門家は、陰陽道の安倍氏が戦国時代以降、この家名を称したもの。概ね江戸時代を通じて諸国陰陽師を組織的に支配し、天文や暦に関して朝幕の御用を達した。明治政府の陰陽寮廃止に伴って実質的に消滅したが、この流れを汲むと称する宗教組織は現在も存在する。
- 3) 仏滅は、言葉としては仏、すなわち釈迦の入滅（死）を意味するが、何ゆえ陰陽家が出し抜けにそんなことを持ち出したのか、理解に苦しむ。実際、幕末の『安政雑書』では「物滅」と表記している。偉大なる先覚者シャーキャムニの死は、なるほど稀代の凶事であるにせよ、同等の凶日が6日ごとに回ってくるのは実に迷惑、我ら凡俗は無邪気に生きてもおられまい。なお、旧暦2月15日（広く仏教徒の間で釈迦入滅の日とされる）の六曜は必ず仏滅になる。あるいは、この事実から遡及して、物滅から仏滅に変わったのかもしれない。
- 4) 月切りとは、月の1日（ついたち）から晦日（みそか）までを当該月とする切り方、つまり、ふつうのひと月である（暦月）。これに対して節切りという切り方があり、暦注の配当には、これを使うほうが多い。節切りは、二十四気の節気当日から次の節気前日までをひと月とする（節月）。たとえば、正月の節気は立春で、2月の節気が啓蟄（明治以前は驚蟄）だから、立春当日から啓蟄前日までを「正月」とする。二十四気の該当日は、旧暦では1か月の範囲で毎年動くけれども、何日

に当たろうと節気で区切ってゆく。ある年に立春が正月2日で啓蟄が2月3日ならば、正月2日から2月2日までが（節月の）正月で、次の年に立春が正月13日で啓蟄が2月14日ならば、正月13日から2月13日までが正月となる。天気予報などで耳にする「暦の上では今日から春（夏秋冬）」というのは、立春（夏秋冬）当日の常套句で、実はこの節切りに則った物言いである。ちなみに、立春は旧12月16日から旧正月15日の間で移動する（例外的に一度だけ旧12月15日があった—明治3年）。

- 5) 筆者は旧暦の話をする場合、「1月」ではなく、必ず「正月」を用いる。それは別に主義信条といったことではなく、旧暦においては決して「1月」と唱えないからである。歴史学的立場としては、当時の用字・用語に従うのが当然であろう。研究者の中にも稀に「1月」を用いる人があることを遺憾とする。
- 6) 実はもう少しスマートな計算方法もある。それは、先勝をゼロとせずに大安をゼロとすると、月と日（ここでいうMとD）とを足したものを6で割った余りをとれば、それが大安0、赤口1、先勝2、友引3、先負4、仏滅5に対応する。六曜を計算で求めることの間抜けさには変わりはないが…。
- 7) このことを顕著に物語る話として筆者がよく引き合いに出すのは、内田正男による確認である。曰く、「1年間の大中小の配列の種類は大変多様で西暦1620年以後の暦を調べて見ると254年間に180とおり近くもあることが分かった」(『日本暦日原典』(雄山閣出版、1975年)497頁(第4版))。
- 8) あまり一般的ではないが、寺院で行なう仏式婚儀もあるし、凶事に友引を嫌うところから、葬儀の日程などで寺院もこの問題と関わる。また、年忌法要の類は慶事と考えられている。ともあれ、仏教寺院でも陰陽家の説く吉凶を意識するあたり、如何にも神仏習合のお国柄、つまり日本らしい、といえよう。
- 9) つまり月の位相（満ち欠けの姿）は連続的变化であって、極端な言い方をすれば、眺めている間にも太さ・丸さが変わる。朔（新月）は月齢ゼロ、

上弦は7.4、望（満月）は14.8、下弦は22.1くらいとされる。月の出ていない時間帯に、それぞれの値（位相）となることも無論ある。

- 10) あくまでも一例だが、引用した文言は次のウェブページに見られる。タイトルには「カレンダー「2017年問題」 大安が仏滅に? プライダル業界大慌て」とある。ちなみに、「大安が仏滅に?」というのは、B案を捨ててA案を採る場合で、最終的には逆にB案に到着したのだから、これは起こらない。

<http://www.withnews.jp/article/f0160113000qq0000000000000000W02j0401qq000012911A>

筆者がかかるといふ点に目くじらを立てた訳は、旧暦の進朔の問題を思い出させたからである。進朔とは、旧暦の計算において、求められた朔時刻が1日の中で一定限度(たとえば1日の4分の3)を過ぎていたら、その日は朔日とせず翌日を朔日とする、という暦術上の技法をいう。これをしないと、前月晦日にわずかながら月を見てしまう可能性があり、それは好ましくないという考えから、こうした技法が考案された。中国唐代のことである。本文に指摘したような(誤った)説明は、さながら「進朔するかしないか」に類する物言いであり、現在の旧暦計算では意味を持たない—現在の旧暦計算は、江戸後期の天保暦法に基づき、現代天文学で得られるデータを加味して用いる「天保暦改」である。また進朔法は、かの『天地明察』の貞享暦(1685年から行用)から廃止された。

- 11) 誤解なきよう、念のため記す。国立天文台で発表する暦要項に毎月の朔が示されるからといって、国家機関が旧暦の使用を存置・推奨しているわけではない。朔はあくまでも、太陽と月との黄経が一致する瞬間という天体現象であって、天文台としては周期的に巡ってくるその現象の情報を提供するに過ぎない。実際、暦要項の当該箇所の表題は「朔弦望」であり、朔のみならず、上弦、望（満月）、下弦の日時も同等に並んでいるし、それぞれが旧暦の何月などということは一言も謳っていない。それを、たとえば六曜の配当などに用いるのは、使う側の勝手である。この「朔弦望」は、科学的情報として(日本の中央標準時で示されて



いることさえ弁えていれば）世界に通用する。一方、それに基づいて六曜などを云々するのは、日本だけの、それも、そういうことに関心ある人々だけの話である。

12) これも一例に過ぎないが、ブライダル情報最大手といってもよいゼクシイのサイトにある「結婚準備完ペキマニュアル-六輝（六曜）カレンダー」にこの注意書きが見られる。<http://zexy.net> から、「結婚情報ゼクシイ」>「結婚マニュアル」>「六輝早見カレンダー」と進めば閲覧できる。が、またぞろ難癖をつけると、国立天文台の発表する暦要項は、たしかに最も精確なものには相違ないが、この文脈で謂うところの「正式な」ものではないことを再確認された。

13) 別に筆者や知己が不利益を被ったわけではないから、式場の名は敢えて伏せる。しかし実在することを示すべく、東海地方、徳川家康所縁の〇市にある式場とだけ言うておこう。ただし、当該式場のウェブサイトにおいても、すでに問題は解消したという内容の補足がなされている。

また、この式場ばかりのことではなく、注10に挙げたウェブページの記事に拠ると、日本ブライダル文化振興協会（公益社団法人）の担当者が「ブライダル業界の方としては2通りの暦をお示しすることしか現段階（ウェブ掲出は2016年1月13日）ではできない」（傍点、引用者）と語ったといい、複数の施設から協会に相談が寄せられたともいう。ということは、少なくとも一時的には、業界全体が2通りの暦による吉日倍増作戦に乗ったといえよう。

問題となった期間の六曜は、両案ともに大安、友引それぞれ5回ずつ。土休日がとくに望ましいだろうからそれに着目すると、A案では3月5日（日・友引）、11日（土・友引）、20日（月・春分・大安）、26日（日・大安）が挙げられる。他方、B案では2月26日（日・友引）、3月4日（土・友引）、19日（日・大安）、25日（土・大安）となる。両案ともに有効とすることにより、3月12日（日）、18日（土）以外のすべての土休日が「好いお日にち」として扱われることがわかる。この方法なら（お客の主体性を重んじるかのように見えるから）

良心的と受け取られたであろう。ブライダル業界にとって、天与ともいうべき得難い好機だったと勘繰ることができる。「そんな、人の悪いセコいこと、毛頭考えませんでした」と叱られそうだが…。一方、A案でカレンダーを生産してしまった業者がもしあれば（多分ないが）、小さからぬ損害に相違ない。

## 参考文献（順不同）

1. 内田正男『暦と時の事典』（雄山閣、1986年）
2. 暦の会編（代表 岡田芳朗）『暦の百科事典 2000年版』（本の友社、1999年）
3. 岡田芳朗他編『暦の大事典』（朝倉書店、2014年）  
なお、毎日の旧暦日付や六曜を一覧できる工具書として以下のものがある。ただし、今回のような不確定要素が潜んでいる可能性に留意されたい。文献5には2017年問題、および同趣の事例についての言及がある（401頁 解説）。
4. 日外アソシエーツ編集部編『20世紀暦 曜日・干支・九星・旧暦・六曜』（日外アソシエーツ、1998年）
5. 日外アソシエーツ編集部編『21世紀暦 曜日・干支・九星・旧暦・六曜』（日外アソシエーツ、2000年）